

【序論】

研究動機・研究目的・研究方法

附属小学校の子どもたちが中心となって参加している「ボール遊びの集い」、教育実習において、低学年と接する機会が多くあった。そこで、運動発達という視点において、最適学習期の前の時期にあたる小学校低学年を重要視し、「ボール遊びの集い」に参加している子どもだけでなく、参加していない子どもにも着目し、どのようなボール操作をしているのか興味を持った。また、技能を向上させるためにどのような指導が可能であるかということに興味をもち、研究したいと考えた。

本研究の目的は、ボール運動の「捕って投げる」という運動の組み合わせにおいて、小学校低学年の子どもたちはどのような動きかたをするのか把握し、技能を向上させていくためにどのような指導をしているのかを明らかにしていく。その方法として、秋田大学教育文化学部附属小学校低学年の子どもを対象とした典型的な指導実践例をもとにして、運動伝承論の立場から考察する。具体的には、ボール運動の授業をビデオに撮り、関与観察し、子どもたちの動きかたを把握する。そして、子どもの運動問題をどのように発見し、どのような指導で子どもの技能を向上させているのかという教師の促発能力を分析していくという方法を用いていく。

【本論】

第一章 事例研究の意義

本章では、事例研究とは何か、また事例研究の特性について述べている。ほかに関与観察とは何かについても述べている。事例研究は、我々の主観で、厳密に探索し記述・解釈することによって、類似する他の事例についての理解を深めようとする。典型的事例に経験、実践や直観とに接点を見出し、主観と主観をすり合わせながら研究していくということが事例研究の特徴である。

第二章 小学校低学年における運動の発達と指導のあり方について

この章では、運動発達の意義や小学校低学年という年齢段階における運動の発達、またその指導のあり方をK・マイネル(1981)による一般論を基にして述べている。年齢があがるにつれ、「投げる」「捕る」などといった個々の運動のみだったものが、2つ以上の運動を組み合わせることができるようになり、また、今まで行なっていた運動の正確性が増していくのである。小学校低学年の子どもは、課題との結びつきが安定してきて、指導がたえずなされなくても目当てをもって動くようになる。運動課題を目的に合ったように明確にとらえ、成し遂げていく能力を養成していくことは、運動学習においても、教育全体

との関連においても重要なことである。

第三章 ハンドボール指導における促発能力について

この章では、ボールゲームの特性からハンドボールはどのような特性をもっているのか、また、促発能力についてまとめた。

「促発能力」とは指導者側の能力であり、「運動発生の指導において、その生徒の動く感じをわかりやすく伝えて、コツを身につけさせる」(金子、2002)ということである。この促発能力を①観察能力 ②交信能力 ③代行能力 ④処方能力 の4つに措定することができる。ここで挙げられた4つの促発分析能力を観察のカテゴリーとして実際の分析を行なった。

第四章 教師の促発能力の分析：小学校1学年ハンドボール授業

この章では、秋田大学教育文化学部附属小学校1年生のハンドボール指導で実際に行われていた教材についてまとめた。また、実際に行われた授業から次のような特徴的な7つの指導場面を取り上げた。①フェイント ②パス・アンド・ラン ③ボールハンドリング ④ボールキャッチ ⑤ドリブル ⑥ジグザグラン ⑦シュートの指導場면을促発能力の4つのカテゴリーに分類し、考察を行なった。その結果、全ての指導場面で教師は子どもの動きをよく観察している様子が見られ、「観察能力」が全体に関わっているということが明らかになった。また、7つの指導場面を見ていくと、全体に一斉指導する際には、運動の動きかたを正解に導くような質問をして子どもたちに考えさせたり、運動をある動きに例えて分かりやすい表現をしたり、リズムで指導するなど、主に、「交信能力」や「代行能力」がみられた。個人指導においては、その子どもの運動をよく観察し、運動問題を瞬時に把握して、ワンポイントのアドバイスで運動を修正するという「処方能力」がみられた。

【結論】

本研究では、教師の促発能力という運動伝承論の立場から、小学校低学年におけるハンドボールの指導場面の事例を取り上げ、関与観察し、考察を行なった。その結果、教師は、一般的な運動発達を把握した上で、実際の対象となる子どもの運動を観察し、運動問題を瞬時に見抜いて、この運動の問題点を見極めながらその子どもに応じた指導をする必要がある。また、多くの子どもたちに一斉指導する際にも、実際の対象となる子どもたちに即した教材づくりや共通理解することができる言葉掛けなど、子どもたちの状況に応じた指導が必要ということが明らかになった。このように教師が子どもたちに指導していくにあたって、4つの促発能力は教師にとって不可欠な能力であり、指導場面に応じて使い分けなければならないものと考えられる。

(引用・参考文献 省略)